若者がつむぐ古志原の絆 ~ヤング古志原の活動をとおして~

松江市古志原公民館

1 古志原地区と古志原公民館の概要

古志原地区は、松江市の南東部に位置し、第二次大戦後開発が進み、住宅地化した。幼稚園、小学校、高等学校が建設され文教地区としての位置を占めるようになった。

近年、少子高齢化が進展し、古志原小学校児童数はピーク時の半数に減少、高齢化率は年々上がり約30%になった。 人口は約13,000人、世帯数は約6,000世帯である。

古志原公民館は昭和 56 年に開設。指定管理者制度による公設自主運営の公民館として、安全・安心、福祉、子育て・青少年育成などの地域課題を「目的縁」として地域縁と融合させた取り組みを進めている。

2 事業の趣旨

長年、次世代を担う若者の地域活動、 公民館活動への参加が少ないことが大 きな課題であった。

そこで、公民館が核となって若者グループ「ヤング古志原」を支援し、多世代との交流を進める若者の地域活動への参加を促進する。特に子ども支援等の地域活動を通して、会員の自己実現を図る活動を推進する。また、若者の視点で地域の課題や良い点、改善点を考え、地域の中で主体的に取り組むことがでる場を創出する。そして、互助の精神にあり場を創出する。そして、互助の精神にありまた、世代を超えて助け合う地域づくりにつなげる。

3 具体的な取り組み内容

会員の自己実現と地域貢献を活動理 念として、精力的に活動を推進してきた。 会員の多様な意見をとり入れ、楽しく活 動する事を中心に据え、無理のない活動を展開した。

(1) 地域探訪&花見会

地域の史跡、自然を巡り、地域の現状や歴史に改めて向き合い、地域への理解を深めた。

(2) 通学路清掃活動(5月、8月)

小中学生、幼稚園児通学路の除草・清掃をし、刈り取った草は公民館に運び堆肥化した。作業を通して、地域の環境を大切にすることを学んだ。

(3) ふるさとまつり参加

小学生対象の職業体験教室として調 髪・整体の体験会を実施。会員の職業を 活かした事業で子ども達と交流した。

(4) キャンプ支援

テント設営、竹コップと箸の製作指導、 炊飯活動支援等を行った。また、肝試し のおどし役も務めた。

(5) 公民館まつり参加

実行委員、協力団体として参加し、子 どもとふれあうダンボールトンネルと バルーンアートのコーナーを担当した。



(バルーンアートで交流する様子)

(6) 水辺の観察会

小学生を対象に馬橋川の水質調査を 行った。生物の観察や試薬等を使った化 学的な調査を実施した。

(7) だんだん夏踊り参加

チーム古志原として参加。地域の方に 踊りを教えてもらい交流した。

(8) 上口ふれあいまつり支援

地域の福祉施設の祭りに参加。餅つきを通して地域や施設の方と交流した。

(9) ピザ交流会

ピザ窯をつくり、子ども広場の子ども 達と交流した。



(ピザづくりの様子)

(10) 地域ケアシンポジウムに参加

地域包括ケア検討委員会等に参加、医療・介護・福祉の専門家の活動内容を聞き、意見交換を行った。

(11) 里づくりシンポジウムに参加

まちづくりについて意見発表した。活動報告を通して、地域住民が一丸となった地域づくりの必要性を訴えた。



(意見発表の様子)

(12) まちづくり意見交換会に参加

「地域版まちづくり総合戦略」について意見交換を行った。若者が大切にされる地域づくりが定住、人口増につながると意見発表した。

(13) 他地区青年団体との交流

生馬地区の若馬会と意見交換会を行った。来年度は一緒に事業を実施する予定である。活動が全市に広がり交流できることを願っている。

4 評価と成果

事業に取り組んだ会員は、地域活動に 楽しさや喜びを感じることができた。自 己実現につながる活動をすれば地域の 役に立つことを知ったことは、事業を続 けていくうえでとても重要だと感じて いる。

活動を通して今までにない人と人との繋がりが生まれ、人の繋がりが活動の原動力になっている。また、地域住民に若者の活動や意見を認識してもらえたことは大きな成果である。

5 今後の課題と見通し

年間を通じて会員募集を展開し、徐々に増えてきたたが十分ではなかった。活動を PR するとともに呼びかけを強める必要がある。

ヤング古志原は、年間を通して活発に活動を続け、地域に活気をもたらしつつめる。新しい発想で企画した事業、地域育動をあざした事業、多世代交流をする事業などに対し、地域住民からが大きくなっている。今後、ヤングあるが大きくなっている。今後、ヤングの活動を自立したものによって、会員を増やし、もまるような支援を続けたい。そして活動の中心に据え、若者が地域できるような支援を続けたい。それできるような支援を続けたい。そしていきないと考えている。

(文責:主事 髙橋仁)